

3. 九州大学大学文書館



大学文書館が一階と二階に入っている旧工学部本館

基本データ

開設年月日：2005年4月

所在地：〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 (箱崎キャンパス)

HPアドレス：<http://www.arc.kyushu-u.ac.jp/>

刊行物：『大学文書館ニュース』、『大学史料叢書』、研究プロジェクト報告書ほか

所蔵資料点数：40,000点

専任職員：教授1名、准教授1名、助教1名、テクニカルスタッフ2名

事務職員2名、事務補佐員(常勤)2名

調査日 2011年8月24日

場所 九州大学 大学文書館

お話しいただいた方 大学文書館教授 折田悦郎氏

調査者 富岡勝、藪下信幸(記録、写真)

1. 「貴学における大学アーカイヴズについて」

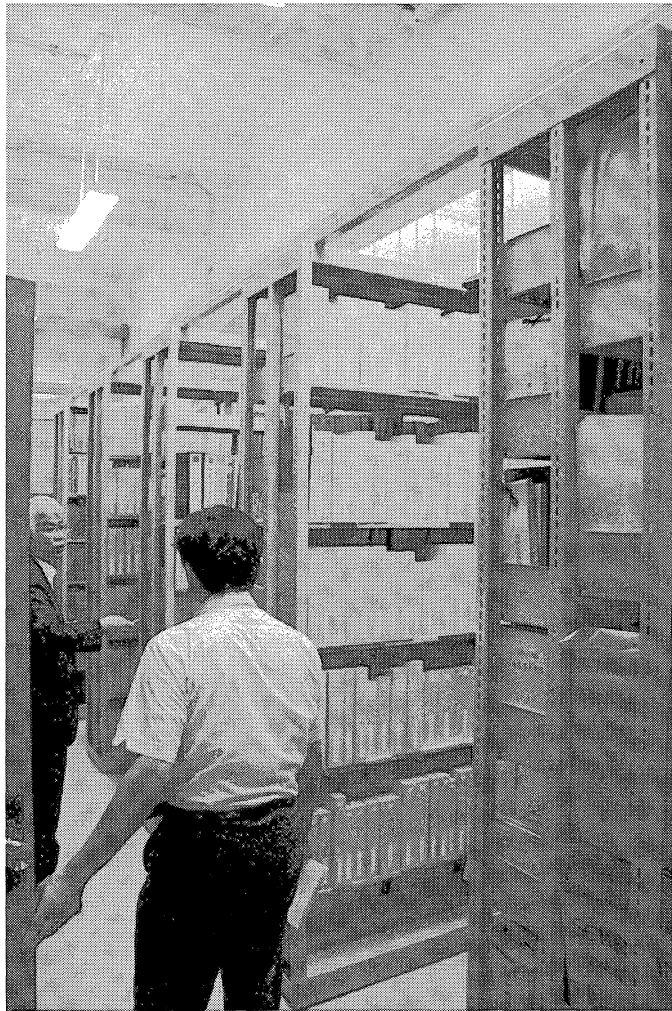
1-1 設置目的・設置経緯 ー大学史編纂後の措置からー

九州大学大学文書館は 2005 年 4 月に、九州大学に関わる資料の収集・整理・保存、九州大学の歴史等に関する調査研究、および資料の公開を目的として設置された。

この大学文書館設立の契機となったのは、九州大学七十五年史の編纂事業（1985 年～1992 年）であり、編纂終了後の 1992 年に九州大学大学史料室が設置され、これが大学文書館につながった。七十五年史編纂では、当時としては先駆的なパソコンを用いた資料のデジタルベース化をすすめた。七十五年史編纂事業における若手教員が大学文書館設立当時に各部局の要職を占めるようになっており、情報の流れをいち早く察知できていたことも役立った。

大学文書館設置にあたっては、総務部企画課と連携した。

大学文書館設置準備の時期に教養部解体があり、「自校史」を全学科目として文書館スタッフが担当できたことも大きい。



書庫

1-2 組織形態 ー大学本部や総務課とのつながりー

アーカイヴズの実現に際しては、組織の認可と専任スタッフ（できれば職員も）の確保が重要となるので、この 2 点に留意した組織づくりを心がけてきた。

館長は、副学長のなかから総長が任命している。この仕組みにより、大学の本部との結びつきの強い組織となっている。

設立当初は、法人文書資料室と大学史資料室の二室が置かれ、2009 年には百年史編集室も設けられた。

室員として、教員および事務職員若干名が置かれると規程で定められている。現在は、専任室員として、教授1名、准教授1名、助教1名の計3名の教員とテクニカルスタッフ2名、事務職員（常勤）2名が配置されている。さらに、事務補佐員（常勤）2名が勤務している。

兼任室員も設けられている。兼任の教員では、人文・社会科学系の教員6名が任命され、大学文書館の研究プロジェクトのメンバーとなっている。兼任の事務職員としては、法人文書資料室長を総務課長が兼任しているのをはじめ、3名の事務職員（総務課および法令審議室）が勤務しており、大学本部の事務組織との連携が強い。

運営組織としては、大学文書館委員会が設けられており、学内の各部局から委員が選出されている。



歴代総長肖像画などの保管

1-3 活動内容 —研究プロジェクトと自校史学習の充実—

主要な活動内容としては、「資料の収集・整理・保存・利用」「資料の調査・研究」「教育」「情報提供」「九州大学百年史の編集」の5点を指摘できる。

資料の収集は、総務課と連携しながら、進めているところである。保存スペースの確保にも力を入れている。

資料の公開では、学内事務スタッフによる閲覧が概ね週1回程度あり、学外からの閲覧はそれより多く、週2,3回程度希望が寄せられている。特に西日本新聞社からの問い合わせは多く、同新聞にはほぼ毎日、九州大学関連の記事が掲載されている。

九州大学の歴史等への調査・研究は、大学文書館の存在意義のアピールとしても位置づけて重視している。通常予算は限られているが、学内外の予算確保（学内研究助成・科学研究費・財団助成金）も積極的に利用しながら、これまで様々な研究プロジェクトを組織してきた。2005年度（平成17年度）以降では、次のような研究プロジェクトを実施した。

競争的資金に係る間接経費

「九州大学「伊都キャンパス」記録プロジェクト」（平成17年度～平成18年度）

受託研究（福岡市）

「九州大学箱崎キャンパス内歴史的資源の現況調査」（平成17年度）

科学研究費補助金(基盤研究(C))

「九州大学における学徒出陣・学徒動員」（平成18年度～平成19年度）

重点的研究教育基盤整備費

「九州大学「キャンパス移転」記録プロジェクト」（平成19年度～平成20年度）

間接経費（全学共通分）

「九州大学〔伊都〕記憶創生プロジェクト」（平成21年度～平成23年度(予定)）

科学研究費補助金(基盤研究(C))

「後発帝国大学の設立理念と実態—九州帝国大学法文学部の場合—」

（平成21年度～平成23年度(予定)）

教育活動には全国的にも早くから力を入れており、1997年には大学史料室専任教官による全学共通教育科目「九州大学の歴史」をスタートさせている。また、自校史だけにとどまらず、大学史全体を扱う授業として、1999年4月からは専任・兼任教官等による全学共通教育科目「大学とは何か—ともに考える—」を開講している。これらの授業に関して以下のよう



所蔵資料の一例

な記録やテキストが刊行されている。

『試行授業「九州大学の歴史」に対する学生の反応について』（平成11年）

『試行授業「大学とは何か 一とともに考える」の記録』（平成12年）

『低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究』（平成13年）

『「低年次教育における九州大学史カリキュラム開発に関する研究」講義録（平成13年）

『大学とはなにか 一九州大学に学ぶ人々へ』（平成14年）

情報提供としては、1992年より『大学史料室ニュース』（第1号より第25号）を発行し、2005年には『大学文書館ニュース』に改称し、第35号まで出している。

写真目録を含む各種資料目録や、研究プロジェクトの報告書も学内外への情報提供の役割を果たしている。

2年前から開始された九州大学百年史の編集は、百年史編集室において通史編・資料編・写真集・別巻の編集、部局史の編集支援を行っている。



百年史編集室

2. 「貴学にとっての大学アーカイブズの意義」について

九州大学の場合、九州大学七十五年史編纂事業から一貫して、大学のアイデンティティのよりどころとしての大学アーカイブズの必要性を訴え続け、そのアピールが次第に浸透してきているのを感じている。

今年度より、九州大学統合新領域学府(専任教員48名以上)に Library Science 専攻(修士10名)が設置され、図書館司書やアーキビストの育成教育を行っており、その教育の一端を大学文書館専任スタッフが担当している。このことから、大学文書館の研究機能や教育機能が学内に認知されていることがわかる。

3. 「国公立大学・私立大学における大学アーカイブズの意義」について

大学アーカイブズのコアは「事務文書の収集・研究・教育」である。これらの活動をおこなう大学アーカイブズには、良い意味での「大学のアイデンティティ」の拠り所としての意義がある。創立者の人物伝・思想だけではない、アーカイブ資料に基づいた客観的「自校史」の提供が重要となる。

さらに、大学アーカイブズには広報担当部署としての意義もある。具体的な資料に基づいて大学の歩みや学生の姿を知らせることは、広報活動の充実につながる。

こうした意義は、国公立大学でも私立大学でも共通している。これから大学アーカイブズをつくらうとする際には、学内でこうした点についての共通認識をどのようにつくっていくかということが重要である。

そのためには、例えば寺崎昌男氏のような大学史と大学アーカイブズの両方に詳しい方に、話をしてもらうのも一つの方法であろう（寺崎氏の講演については、近畿大学内でも検討していた件であり、2011年12月17日に全学FD研究集会として実現した。第2部を参照）。

調査を振り返って

九州大学の事例を調査することで、近畿大学におけるアーカイブズ設置に際しては、「ヒト(専任スタッフ)・モノ(大学組織のなかでの独立機関としての位置づけとスペース)・カネ(年間予算)」を十分に確保することが前提となることを実感した。これら運営資源が不足したままの、兼任スタッフのみによる組織発足は無理が生じるので、何としても避けるべきである。そのために、学内で認識の共有をはかりながら、方策を講じていく必要がある。

「自校史」についても、大学アーカイブズを活用しながら、十分な準備に基いて「再発足」する必要があると感じる。

さらに、大学アーカイブズと外部との結びつき(学外予算の確保、地域の広報活動との連携)も重要だと感じた。

(富岡勝)